

その他の研究プロジェクト等

若手教員研究成果報告書

ヤギは「乗り物酔い」をするか？

農学部助教 青山真人

【ヤギの輸送】

以前から、家畜の輸送は様々な動物福祉上・産業上の問題を引き起こしているが、家畜が乗り物酔いをするかどうかは明らかになっていない。明らかになっていない理由の一つは、反芻動物やウマは嘔吐をしないことである。本研究は、ヤギを用い、ヤギにとって「気分が悪い」状態を示す指標を明らかにし、さらにその指標を用いてヤギが乗り物酔いをするかどうかを明らかにすることを目的とした。

ヒトやイヌに嘔吐を引き起こす薬品であるアポモルフィン(0.1mg/体重1kg)およびシスプラチン(1mg/体重1kg)を血中投与し、その行動学的反応を観察し、輸送のそれと比較した。アポモルフィンの投与により、ヤギのあくびの回数、舌舐めずりの回数が増加し、また、同じ場所を周回する様子が観察された。5種の飼料(チモシーグラス、ヘイキューブ、ペレット、大麦、敷料用の稲藁)の嗜好性に変化はなかった。一方、シスプラチンの投与により、ヤギは瞼を閉じて下を向いたまま動かなくなった。また、個体によっては摂食量は顕著に減少し、さらに通常だと嗜好性が高い大麦やペレットを摂食せず、嗜好性が低いチモシーや稲藁をより摂食した。ヤギを軽トラックで輸送した際、口吻の周りに泡をふき、瞼を閉じて下を向いて動かない個体がみられた。さらに、個体によっては輸送後もこの様子が観察された。また、個体によ

ては大麦やペレットよりもチモシーを優先的に摂食した。

まとめると、ヤギにおいて、アポモルフィン(舌舐めずり)あるいはシスプラチン(瞼を閉じて下を向いて動かない、チモシーグラスに対する嗜好性)投与に対する反応と輸送による反応には幾つかの類似点があり、これらはヤギにおいて気分が悪いことを示す指標となる可能性が示唆された。さらに個体によっては、輸送により気分が悪くなっているものと考えられた。

今後は、ジメンヒドリナートなどの酔い止め薬を投与してヤギを輸送し、上記の反応が軽減されるか否かを検討する予定である。

【ウマの輸送】

ウマを馬運車で輸送する際の行動学的・生理学的反応を検討した。輸送により、ウマの唾液中コルチゾル濃度は増加し、また、耳を動かす回数が増加した。騒音防止用のマスクを着用して輸送すると、耳を動かす回数は増加せず、また、唾液の中コルチゾル濃度の増加の程度が軽減された。これらの結果から、ウマは輸送によりストレスを感じるが、その程度はマスクの着用によりある程度軽減される可能性が示された。ウマについては、乗り物酔いをしている様子は観察されなかった。